

明日の扉

あおもり

第6部 いまどきの若者

◇4◇

中学校には、興全体でのレールを見るデータがなく進んでいく。でもほとんどが高校に進学する。この事実と、点数が高いほど良いという入試制度は基本的に変わっていない。子どもたちは、どの位置にいるのか、目安を知りたがっている。

八戸学習塾協議会の事務局長を務める、志学塾の畑山篤良(あつら)は、そう話している。それを受けて、ブルーのジャージのヒトミ(みとみ)が続けた。

「学校の先生って、怖いじゃないか、近寄り難い男たちが次々と乗り込んだ。だが教室の明かりは、まだついていて、人影も見えない。納得のいかない生徒が、勉強を続けているのだ。十くない、とさう。」

(文中は仮名)

「塾の方が楽しい」

不安を共有できる空間

「黙想三十秒、始めっ」るアヤカ(あやか)は、気にする高校入試まで二週間を切った、ある金曜日の夜。八戸市の学習塾「志学塾」の授業中。受験を直前に控えた中学三年生の教室に、女性講師の源(りん)とした声が響く。六時五十分。授業開始の合図だ。

目の前の黒板には、過去のテスト成績が張り出されている。席は成績順だ。「この方がいいよ。前の人が追い付こう、って目標ができるからね」

休み時間、後方の席に座るアヤカは、受験まであと一年と迫った二年の三学期から通い始めた。学校の授業がよく分からなかった。「なんか、ヤバイなって思っ。そしたら友達と一緒にソミ(そみ)も行って言うから、私もって。まあ、親にも行ったらって、言われてたんだけどね」

アヤカの学級では、大半の生徒が塾に通っている。「中二までは半分くらい人だけになった。できる子は必要ないんだよね」隣にいたソミ(みとみ)がうなずいた。彼女らに、塾へ通うのが特別だ、という意識はないようだ。ただ受験に對する「何とも言えない不安」(アヤカ)がある。

「業者テストの廃止で、静かに流れる。その中で、じる」

局長を務める、志学塾の畑山篤良(あつら)は、そう話している。それを受けて、ブルーのジャージのヒトミ(みとみ)が続けた。

「学校の先生って、怖いじゃないか、近寄り難い男たちが次々と乗り込んだ。だが教室の明かりは、まだついていて、人影も見えない。納得のいかない生徒が、勉強を続けているのだ。十くない、とさう。」

(文中は仮名)

もう一つの学校



高校入試を間近に控え、直前講習会に臨む中学三年生たち。黒板には、実名入りのテスト成績が。将来への不安と期待が交錯する